

改正案

現行

<p>（情報通信の技術を利用した提供） 第三十条の六（略）</p> <p>2 前項各号に掲げる方法は、次に掲げる基準に適合するものでなければならぬ。</p> <p>一・二（略）</p> <p>三 前項第一号ハ又はニに掲げる方法にあつては、記載事項に掲げられた取引を最後に行った日以後五年間（当該期間が終了する日までの間に当該記載事項に係る苦情の申出があつたときは、当該期間が終了する日又は当該苦情が解決した日のいずれか遅い日までの間）次に掲げる事項を消去し又は改変することができないものであること。ただし、閲覧に供している記載事項を書面により交付する場合、顧客の承諾（令第十二条の三に規定する方法による承諾をいう。）を得て前項第一号イ若しくはロ若しくは第二号に掲げる方法により提供する場合又は顧客による当該記載事項に係る消去の指図がある場合は、当該記載事項を消去することができる。</p> <p>イ・ロ（略）</p> <p>四（略）</p> <p>3（略）</p>	<p>（情報通信の技術を利用した提供） 第三十条の六（略）</p> <p>2 前項各号に掲げる方法は、次に掲げる基準に適合するものでなければならぬ。</p> <p>一・二（略）</p> <p>三 前項第一号ハ又はニに掲げる方法にあつては、記載事項に掲げられた取引を最後に行った日以後五年間（当該期間が終了する日までの間に当該記載事項に係る苦情の申出があつたときは、当該期間が終了する日又は当該苦情が解決した日のいずれか遅い日までの間）次に掲げる事項を消去し又は改変することができないものであること。ただし、閲覧に供している記載事項を書面により交付する場合、顧客の承諾（令第十二条の三に規定する方法による承諾をいう。）を得て前項第一号イ、ロ若しくは同項第二号に掲げる方法により提供する場合又は顧客による当該記載事項に係る消去の指図がある場合は、当該記載事項を消去することができる。</p> <p>イ・ロ（略）</p> <p>四（略）</p> <p>3（略）</p>
--	---

(特定投資家への復帰申出をした者が同意を行う書面の記載事項)

第三十条の七の二 準用金融商品取引法第三十四条の二第十一項に規定する内閣府令で定める事項は、次に掲げる事項とする。

一・二 (略)

三 復帰申出者(準用金融商品取引法第三十四条の二第十一項に規定する復帰申出者をいう。以下この条において同じ。)が次に掲げる事項を理解している旨

イ 準用金融商品取引法第四十五条各号(第三号及び第四号を除く。)に掲げる規定は、対象契約に関して復帰申出者が当該各号に定める者である場合(同条ただし書に規定する場合を除く。)には適用されない旨

ロ (略)

四・五 (略)

(申出をした特定投資家以外の顧客である法人が同意を行う書面の記載事項)

第三十条の九 準用金融商品取引法第三十四条の三第二項第四号イに規定する内閣府令で定める事項は、準用金融商品取引法第四十五条各号(第三号及び第四号を除く。)に掲げる規定は、対象契約(同項第二号に規定する対象契約をいう。次項及び第三十条の十の二において同じ。)に関して申出者(準用金融商品取引法第三十四条の三第二項に規定する申出者をいう。次項において同じ。)が当該各

(特定投資家への復帰申出をした者が同意を行う書面の記載事項)

第三十条の七の二 準用金融商品取引法第三十四条の二第十一項に規定する内閣府令で定める事項は、次に掲げる事項とする。

一・二 (略)

三 復帰申出者(準用金融商品取引法第三十四条の二第十一項に規定する復帰申出者をいう。以下この条において同じ。)が次に掲げる事項を理解している旨

イ 準用金融商品取引法第四十五条各号に掲げる規定は、対象契約に関して復帰申出者が当該各号に定める者である場合(同条ただし書に規定する場合を除く。)には適用されない旨

ロ (略)

四・五 (略)

(申出をした特定投資家以外の顧客である法人が同意を行う書面の記載事項)

第三十条の九 準用金融商品取引法第三十四条の三第二項第四号イに規定する内閣府令で定める事項は、準用金融商品取引法第四十五条各号に掲げる規定は、対象契約(同項第二号に規定する対象契約をいう。次項及び第三十条の十の二において同じ。)に関して申出者(準用金融商品取引法第三十四条の三第二項に規定する申出者をいう。次項において同じ。)が当該各号に定める者である場合には適

号に定める者である場合には適用されない旨とする。

2 (略)

(申出をした特定投資家以外の顧客である個人が同意を行う書面の記載事項)

第三十条の十四 準用金融商品取引法第三十四条の四第六項において準用する準用金融商品取引法第三十四条の三第二項第四号イに規定する内閣府令で定める事項は、準用金融商品取引法第四十五条各号(第三号及び第四号を除く。)に掲げる規定は、対象契約(同項第二号に規定する対象契約をいう。次項及び第三十条の十四の三において同じ。)に関して申出者が当該各号に定める者である場合には適用されない旨とする。

2 (略)

(特定信託契約の締結の業務の内容についての広告等の表示方法)

第三十条の十六 信託会社が行う特定信託契約の締結の業務の内容について広告又は前条に規定する行為(次項において「広告等」という。)をするとき、準用金融商品取引法第三十七条第一項各号(第二号を除く。)に掲げる事項について明瞭かつ正確に表示しなければならない。

2・3 (略)

(契約締結前交付書面の記載方法)

用されない旨とする。

2 (略)

(申出をした特定投資家以外の顧客である個人が同意を行う書面の記載事項)

第三十条の十四 準用金融商品取引法第三十四条の四第六項において準用する準用金融商品取引法第三十四条の三第二項第四号イに規定する内閣府令で定める事項は、準用金融商品取引法第四十五条各号に掲げる規定は、対象契約(同項第二号に規定する対象契約をいう。次項及び第三十条の十四の三において同じ。)に関して申出者が当該各号に定める者である場合には適用されない旨とする。

2 (略)

(特定信託契約の締結の業務の内容についての広告等の表示方法)

第三十条の十六 信託会社が行う特定信託契約の締結の業務の内容について広告又は前条に規定する行為(次項において「広告等」という。)をするとき、準用金融商品取引法第三十七条第一項各号に掲げる事項について明瞭かつ正確に表示しなければならない。

2・3 (略)

(契約締結前交付書面の記載方法)

第三十条の二十一 契約締結前交付書面には、準用金融商品取引法第三十七条の三第一項各号（第二号から第四号まで及び第六号を除く。）に掲げる事項を工業標準化法（昭和二十四年法律第八十五号）に基づく日本工業規格（次項及び第三項において「日本工業規格」という。）Z八三〇五に規定する八ポイント以上の大きさの文字及び数字を用いて明瞭かつ正確に記載しなければならない。

2 (略)

3 信託会社は、契約締結前交付書面には、第三十条の二十三第一項第一号に掲げる事項及び準用金融商品取引法第三十七条の三第一項各号（第二号から第四号まで及び第六号を除く。）に掲げる事項のうち顧客の判断に影響を及ぼすこととなる特に重要なものを、日本工業規格Z八三〇五に規定する十二ポイント以上の大きさの文字及び数字を用いて当該契約締結前交付書面の最初に平易に記載するものとする。

(信託財産状況報告書の交付頻度)

第三十七条の二 法第二十七条第一項本文に規定する内閣府令で定める場合及び内閣府令で定める期間は、次の各号に掲げる場合及びその区分に応じ当該各号に定める期間とする。

一 (略)

二 公的年金制度の健全性及び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律（平成二十五年法律第六十三号）以下この号及び第四十条第十項において「平成二十五年厚生年金等改

第三十条の二十一 契約締結前交付書面には、準用金融商品取引法第三十七条の三第一項各号に掲げる事項を工業標準化法（昭和二十四年法律第八十五号）に基づく日本工業規格（次項において「日本工業規格」という。）Z八三〇五に規定する八ポイント以上の大きさの文字及び数字を用いて明瞭かつ正確に記載しなければならない。

2 (略)

3 信託会社は、契約締結前交付書面には、第三十条の二十三第一項第一号に掲げる事項及び準用金融商品取引法第三十七条の三第一項各号に掲げる事項のうち顧客の判断に影響を及ぼすこととなる特に重要なものを、日本工業規格Z八三〇五に規定する十二ポイント以上の大きさの文字及び数字を用いて当該契約締結前交付書面の最初に平易に記載するものとする。

(信託財産状況報告書の交付頻度)

第三十七条の二 法第二十七条第一項本文に規定する内閣府令で定める場合及び内閣府令で定める期間は、次の各号に掲げる場合及びその区分に応じ当該各号に定める期間とする。

一 (略)

二 厚生年金保険法（昭和二十九年法律第一百五号）第三百十条の二第一項又は国民年金法（昭和三十四年法律第四十一号）第二百二十八条第三項の規定による信託契約である場合 三月

「正法」という。)附則第五条第一項の規定によりなおその効力を有するものとされる平成二十五年厚生年金等改正法第一条の規定による改正前の厚生年金保険法(昭和二十九年法律第百十五号)。

第四十条第十項において「改正前厚生年金保険法」という。)第百三十条の二第一項又は国民年金法(昭和三十四年法律第百四十一号)第百二十八条第三項の規定による信託契約である場合三
月

(信託財産に損害を生じさせ、又は信託業の信用を失墜させることのない体制の整備に関する事項)

第四十条 (略)

259 (略)

10 信託会社は、平成二十五年厚生年金等改正法附則第五条第一項の規定によりなおその効力を有するものとされる改正前厚生年金保険法第百三十条の二第一項の規定による信託契約(以下この項及び次条第二項ただし書において「年金信託契約」という。)を締結し、当該年金信託契約に基づき、平成二十五年厚生年金等改正法附則第五条第一項の規定によりなおその効力を有するものとされる改正前厚生年金保険法第百三十条の二第二項に規定する年金給付等積立金の運用(以下この項及び次条第二項第八号において「積立金の運用」という。)を行う場合において、当該年金信託契約の相手方である存続厚生年金基金(平成二十五年厚生年金等改正法附則第三条第十一号に規定する存続厚生年金基金をいう。以下この項及び次条第

(信託財産に損害を生じさせ、又は信託業の信用を失墜させることのない体制の整備に関する事項)

第四十条 (略)

259 (略)

10 信託会社は、厚生年金保険法第百三十条の二第一項の規定による信託契約(以下この項及び次条第二項ただし書において「年金信託契約」という。)を締結し、当該年金信託契約に基づき、同法第百三十条の二第二項に規定する年金給付等積立金の運用(以下この項及び次条第二項第八号において「積立金の運用」という。)を行う場合において、当該年金信託契約の相手方である厚生年金基金から同法第百三十六条の四第三項の規定により同項に規定する事項を示されたときに、当該厚生年金基金に対して、その示されたところに従って当該積立金の運用を行うことによる利益の見込み及び損失の可能性について、当該厚生年金基金の知識、経験、財産の状況及び年金信託契約を締結する目的に照らして適切に説明を行うための十

二項において同じ。)から平成二十五年厚生年金等改正法附則第五
条第一項の規定によりなおその効力を有するものとされる改正前厚
生年金保険法第百三十六条の四第三項の規定により同項に規定する
事項を示されたときに、当該存続厚生年金基金に対して、その示さ
れたところに従って当該積立金の運用を行うことによる利益の見込
み及び損失の可能性について、当該存続厚生年金基金の知識、経験
、財産の状況及び年金信託契約を締結する目的に照らして適切に説
明を行うための十分な体制を整備しなければならない。

(信託財産に係る行為準則)

第四十一条 (略)

2 法第二十九条第一項第四号に規定する内閣府令で定める行為は、
次に掲げる行為とする。ただし、第六号から第八号までに掲げる行
為については、年金信託契約である場合に限る。

一 五 (略)

六 存続厚生年金基金が公的年金制度の健全性及び信頼性の確保の
ための厚生年金保険法等の一部を改正する法律の施行に伴う経過
措置に関する政令(平成二十六年政令第七十四号。次号において
「平成二十六年経過措置政令」という。)第三条第二項の規定に
よりなおその効力を有するものとされる公的年金制度の健全性及
び信頼性の確保のための厚生年金保険法等の一部を改正する法律
の施行に伴う関係政令の整備等に関する政令(平成二十六年政令
第七十三号)第一条の規定による廃止前の厚生年金基金令(昭和

分な体制を整備しなければならない。

(信託財産に係る行為準則)

第四十一条 (略)

2 法第二十九条第一項第四号に規定する内閣府令で定める行為は、
次に掲げる行為とする。ただし、第六号から第八号までに掲げる行
為については、年金信託契約である場合に限る。

一 五 (略)

六 厚生年金基金が厚生年金基金令(昭和四十一年政令第三百二十
四号)第三十九条の十五第一項の規定に違反するおそれがあるこ
とを知った場合において、当該厚生年金基金に対し、その旨を通
知しないこと。

四十一年政令第三百二十四号。同号において「廃止前厚生年金基金令」という。）第三十九条の十五第一項の規定に違反するおそれがあることを知った場合において、当該存続厚生年金基金に対し、その旨を通知しないこと。

七 存続厚生年金基金から、平成二十六年経過措置政令第三条第二項の規定によりなおその効力を有するものとされる廃止前厚生年金基金令第三十条第一項第一号の規定に違反し、信託財産の運用として特定の金融商品（金融商品取引法第二条第二十四項に規定する金融商品をいう。）を取得させることその他の運用方法の特定があつた場合において、これに応じること。

八 積立金の運用に関して、存続厚生年金基金に対し、不確実な事項について断定的判断を提供し、又は確実であると誤解させるおそれのあることを告げること。

3～5 (略)

(適用除外)

第五十一条の十 令第十五条の三第九号に規定する内閣府令で定める場合は、賃貸借契約における賃貸人が賃貸借契約に付随して管理する金銭等を信託財産として信託法第三条第三号に掲げる方法によって信託をする場合とする。

(登録申請書のその他の記載事項)

第七十条 法第六十八条第一項第六号に規定する内閣府令で定める事

七 厚生年金基金から、厚生年金基金令第三十条第一項第一号の規定に違反し、信託財産の運用として特定の金融商品（金融商品取引法第二条第二十四項に規定する金融商品をいう。）を取得させることその他の運用方法の特定があつた場合において、これに応じること。

八 積立金の運用に関して、厚生年金基金に対し、不確実な事項について断定的判断を提供し、又は確実であると誤解させるおそれのあることを告げること。

3～5 (略)

(適用除外)

第五十一条の十 令第十五条の三第八号に規定する内閣府令で定める場合は、賃貸借契約における賃貸人が賃貸借契約に付随して管理する金銭等を信託財産として信託法第三条第三号に掲げる方法によって信託をする場合とする。

(登録申請書のその他の記載事項)

第七十条 法第六十八条第一項第六号に規定する内閣府令で定める事

項は、次に掲げる事項とする。

一 (略)

二 法人(金融機関及び保険業法第二条第二項に規定する保険会社を除く。)である場合において、その役員が、他の法人の常務に従事し、又は事業を営むときにあつては、当該役員の名又は名称並びに当該他の法人又は事業所の商号若しくは名称及び事業の種類

(紛争解決委員の利害関係等)

第八十条の十一 (略)

2 法第八十五条の十三第三項第三号に規定する内閣府令で定める者は、次に掲げるいずれかの資格を有し、かつ、消費生活相談(消費者契約法(平成十二年法律第六十一号)第十三条第三項第五号に規定する消費生活相談をいう。)に応ずる業務に従事した期間が通算して五年以上である者とする。

一 (略)

二 一般財団法人日本産業協会が付与する消費生活アドバイザーの資格

三 一般財団法人日本消費者協会が付与する消費生活コンサルタントの資格

3 (略)

項は、次に掲げる事項とする。

一 (略)

二 法人である場合において、その役員が、他の法人の常務に従事し、又は事業を営むときにあつては、当該役員の名又は名称並びに当該他の法人又は事業所の商号若しくは名称及び事業の種類

(紛争解決委員の利害関係等)

第八十条の十一 (略)

2 法第八十五条の十三第三項第三号に規定する内閣府令で定める者は、次に掲げるいずれかの資格を有し、かつ、消費生活相談(消費者契約法(平成十二年法律第六十一号)第十三条第三項第五号に規定する消費生活相談をいう。)に応ずる業務に従事した期間が通算して五年以上である者とする。

一 (略)

二 財団法人日本産業協会(大正七年二月二十六日に財団法人国産奨励会という名称で設立された法人をいう。)が付与する消費生活アドバイザーの資格

三 財団法人日本消費者協会(昭和三十六年九月五日に財団法人日本消費者協会という名称で設立された法人をいう。)が付与する消費生活コンサルタントの資格

3 (略)

